

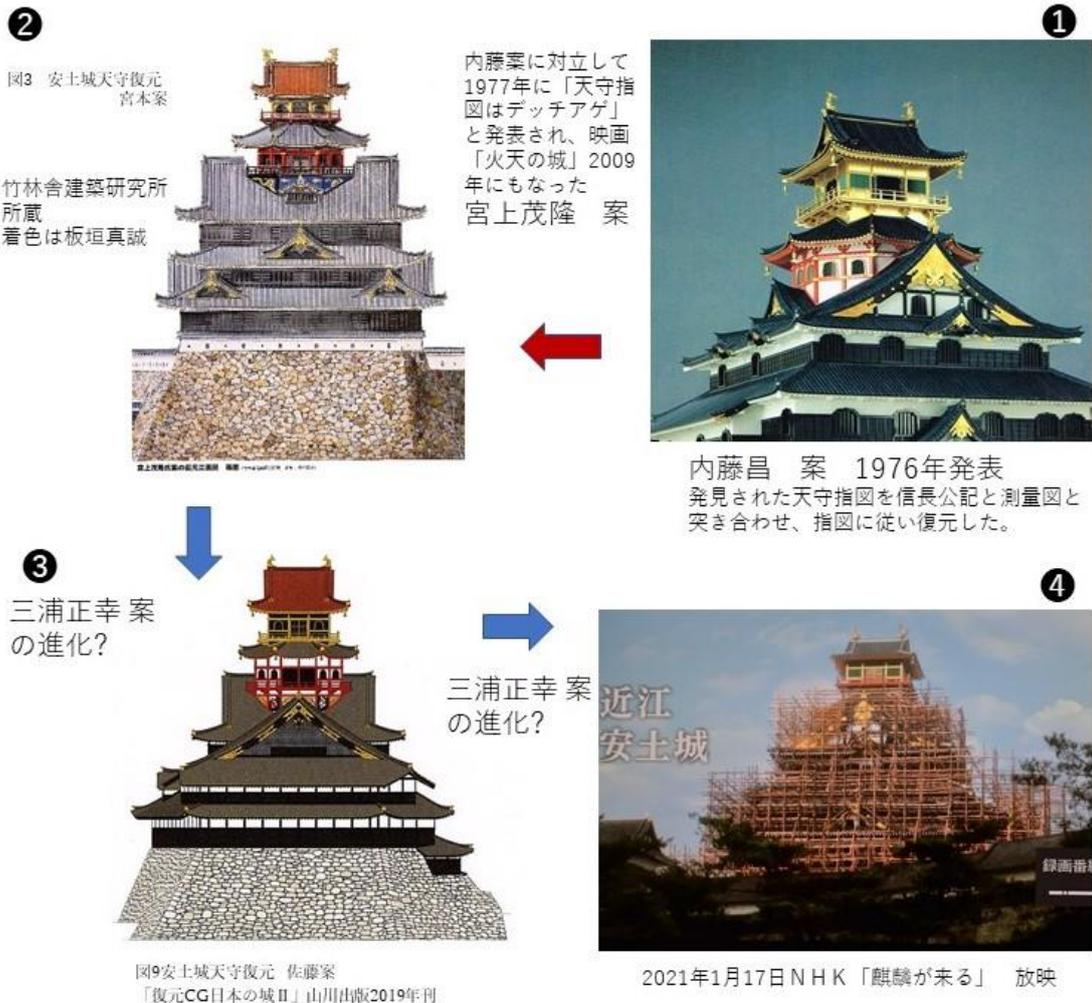
安土城天守復元 NHK大河ドラマ「麒麟が来る」

2021年1月30日高橋和生 FB記

恩師・内藤昌先生が1976年に復元した安土城天守が、どうして「麒麟が来る」で採用されず、三浦正幸（佐藤大規）氏の復元案が採用されるのでしょうか。

大河ドラマの建築考証に、平井先生のと三浦正幸氏が座った事よるのであって、三浦案が日本建築学会で認めれたわけではありません。私は、今年の日本建築学会で、鬼籍にはいられた内藤先生の代わりに三浦案を批判しないとイケないと思い、毎週の放送を楽しみに見えています。

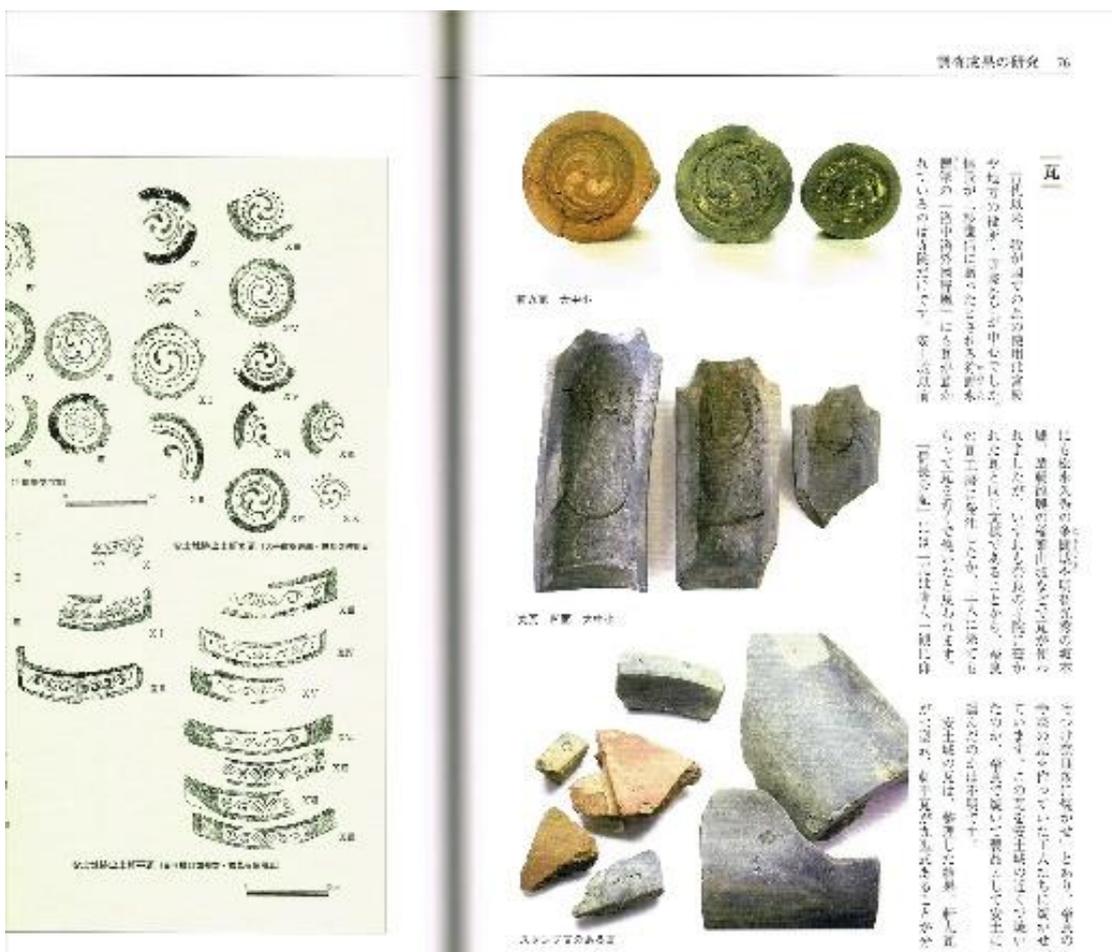
名古屋城天守の木造化事業に反対しているうちにすっかり城マニアになってしまった私、69歳です。



内藤復元案 1976年国華 987号 988号の否定は、宮上茂隆氏（1940~1998）によりあくる1977年国華 998号 999号に出ています。「内藤復元案のキリスト教会をまねた吹き抜けなど、あるわけない。」と、内藤先生（1932~2012）の復元の根拠である江戸中期の「天守指図」を「大工・池上が信長公記を読んで創作したもの」と決めつけました。その後、大工・岡部又右エ門を主人公とする映画「火天の城」2009年によって宮上案は全国に広められました。

宮上氏の弟子筋の三浦正幸（1954~）氏は2005年に、宮上案の4角の石垣を否定し、遺構として残る8角の石垣に乗せた天守復元案を発表しました。それが「麒麟が来る」の安土城天守の姿になっています。但し、この17日の放映では、最上階の赤い瓦は発掘調査から否定されており、「いぶし瓦」となっています。

注：三浦氏は著書「城のつくり方図典」2005年小学館、雑誌テレビでは「私が復元した。」と言っていますが、学会の発表は弟子の佐藤大規氏。中村泰朗氏です。



注：発掘調査 20 年の記録 信長の城と城下町 滋賀県教育委員編著 2009 年より

信長公記に「唐人一觀に瓦を焼かせた。奈良瓦工に焼かせた。」とあり、遺跡から赤瓦も出土していたので、中国にある赤い釉がかかった瓦が使われたと宮上氏、三浦氏、佐藤氏は復元したのです。内藤先生は、火災にあわず、黒い軒先瓦の先に金が押してある綺麗な瓦が出土していることから「黒い瓦」として復元しています。

1991年～2009年滋賀県教育委員会が発掘調査を行い、大量の瓦を掘り出して「赤い釉のかかった瓦ではなく、長時間、高温にさらされて赤く変色したもの」と結論付けました。天主が火事で倒れた方向、東南に、炭化した木材と共に赤に変色した瓦が多くある事は、倒れた後も木材は燃え続け、長時間高温にさらされたのです。一方、倒れて飛び散ったまま、火災にあっていない綺麗な瓦も周囲に多く出土しています。一枚の瓦で黒から赤にグラデーションしている瓦も見つかっています。

瓦研究家の駒井鋼之助（1903～1988年）によれば、「燻（いぶ）し瓦」の製法がわが国に伝えられたのはこのときで、それ以前の瓦は色が不揃いだったのが、どの瓦も同じ黒一色に焼かれるようになったのだそうです。原理的には現在の燻し瓦もこの時代のものと同じ製法で造られて「銀黒色」なのですが、燻し瓦のことを黒瓦ともいうのは、初期の燻し瓦が黒かったことの名残であろう、とあります。

三浦正幸氏による復元案の進化？は、宮上復元案からどんどん内藤復元案に近づいています。もう、素人がパッと見た場合には差は分からないでしょう。

しかし、内藤先生は「天守指図」による復元を、遺跡調査と信長公記とすり合わせて3点で行っているのですが、三浦氏は「天守指図は、江戸期の大工の創作」として相変わらず無視しており、新たな発掘調査記録と信長公記の2点によって復元しているので根本的に違っています。

平面図、断面図によってわかるインテリアに案の違いが大きく出ているのですが、NHKはインテリアを放映しないでしょう。なぜなら、金、朱、黒のインテリアのレプリカ作成にはコストがかかりすぎます。

注：内藤復元案の模型は安土にあります。セビリア万博に出展した5階、6階の原寸模型は「信長の館」、100分の1の模型は「城郭資料館」に。

安土日記の村井貞勝の天正7年正月拜見記では「御殿主を見させられた」であるのに、太田牛一は筆記ものに改変した信長公記では「安土山天主之次第」と「天主」をタイトルにした。大工・中井正清宛に江戸幕府重臣から名古屋城を急げとの督促の手紙が残るが「天主」と「天守」が混在している。

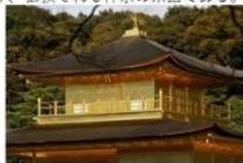
信長は天主（ゼウス）たらんと欲した。1582年11月5日ルイス・フロイス記

内藤昌氏は「復元安土城」において、造形の意味—天道思想を主張していた。キリスト教だけではない。儒教、道教、仏教、神道、キリスト教の全てを踏まえ、信長は神となる事を望んだと。城郭内に摺見寺建て、津島牛頭天王社から発願法師を呼び住持とし、「子の誕生日を聖日とし、毎月来るべし。現世利益が得られる。」とフロイスは書く。天主の「吹き抜け」は信長が宣教師から教会の身廊を見聞していたのではないかと内藤昌氏は推定しているが、現在、この部分だけがクローズアップされて「天主」造形の意味がぼけてしまっている。大工（設計施工者）の視点で、先例によることを示す。

金閣 本末は舍利殿であり、仏教それも禅宗の系譜である。



三層「兜塚頂」庭の眺めを楽しむだけでなく、内部は座禅を組みの禪堂に見える。



檜皮葺き方形の屋根を瓦ぶきの入母屋に



天主 1579年最上階の内部には、道教・儒教の絵が描かれた。



内外金戸黒漆
天板花鳥
三皇五帝
老子
文王、周公
孔子
孔門十哲



二層「潮音洞」観音像を四天王が囲み、天井には極彩色の天人飛天の絵がある。



外は神の様式
内は持仏堂



八角円堂は世の中心を示す



外陣 龍、鯉
釈迦を中心に、沙門十大弟子が描かれた。
天井は天人飛天、2堂の置き堂がある。



南蛮寺 京都

吉田社 太元宮

八角円堂は法隆寺、興福寺が著名であるが吉田兼俱は「唯一神道」を唱え、創造主宰神を祀り、宇宙の中枢と言う。

安土城下のカザ（修道院）も三階建てであり、一階は茶座敷を含んだ宿泊用の睡室を構え、二階は広間と環堂、三階はセミナリオ（神学校）



宝塔

法華経に説かれる過去仏多宝如来の舍利塔が起源
地階からの吹き抜け、4間（8.5m）×6間（12.7m）高さ1.5mの中に二本の大黒柱が立ち、2階に舞台と縁、3階には橋が渡り、縁が回る。
一階には「信長と思え」とされた石、ポンサン（盆山）がある。

内藤先生は「造形の意味—天道思想」を論文（国華 987 号、988 号）で主張されています。天守のデザインは、道教・儒教（6階）、仏教・吉田神道（5階）、牛頭天王信仰ンサン（1階）、法華経宝塔（地下1階）と、あらゆる宗教要素を積み上げて出来ており、唯一絶対神を信じるキリスト教が天主教とも言われたことから、「信長は天下布武をなしとげ、安土山に現人神（あらひとがみ）として祀られることを「天主」造形に求めた」と、内藤先生はルイス・フロイスの書簡を元に展開しています。

しかし、信長は南蛮文化を吸収するも、キリスト教に傾くことはなく、ルイス・フロイスは「信長は法華宗というが、神仏を恐れぬ無神論者でもある。」とも書いています。後に、戦国の世を治めた秀吉が豊国神社に祀られ、家康が東照宮に祀られたと同じく、安土城天主は「天道思想」に基づく造形であり、キリスト教だけを特別視されるものではありません。



〔挿圖 2—22〕 昭和 15 年發掘調査前の天守臺跡—『滋賀縣史蹟調査報告書第 11 冊』所収

しかし安土城跡は天正十年の焼亡後永らく放置され、慶長八年から元和八年に及ぶ彦根築城においてはその石垣が轉用(『井伊家年譜』)、以來自然の崩壊にまかせてきている。特に頂上の天守臺跡は當初から土砂に埋没していたようだ。それは昭和十五年發掘調査時迄、もし風雨に晒されれば日ならずして消失している筈の當初のまゝの石藏床面叩き漆喰が傳存していたをみても明白である。更に貞享四年『近江國蒲生郡安土古城圖』(史5—4)(挿圖序—4)において、東側中央に登閣石段をもつ矩形天守臺を極めて常識的に描いている事も關連して參考にならう。當時現今の如く天守臺特に石藏内部が露出して不等邊八角形の形狀が知られていたら、當然に記していなければならぬ。大正四年測量の「安土城趾圖」(『近江蒲生郡志』所収)においても同様で、要するに天守臺跡は、昭和十五年迄土砂に埋没し、樹木の叢生する一山と化していたのである(挿圖2—22)。江戸時代において、加賀藩御大工が他國におもむき、特に許可されて發掘調査をなし、不等邊八角形の天守臺を知る可能性は、まず絶無としてよからう。よしんば、そうした萬が一の異例を假りに認めるにせよ、その結果で作製された本指圖に安土城の明記がない事を、どう理解できようか。右平正次自身が安土

中村泰朗氏は、2020年9月日本建築学会に「静嘉堂文庫「天守指図」に関する考察」を出しました。中村氏は広島大学文学研究科を定年退官された三浦正幸氏を引き継ぎ、3月に准教授になっています。宮上茂隆氏の「天守指図は大工・池上が信長公記を読んで創作したもの」が、43年ぶりによみがえりました。

「天守指図」は、「天守」だけで「安土」も「織田信長」も書かれないまま、1760年頃に7代目池上が、3代目の祖本を写したことまでは宮上氏も認めています。しかし、その祖本は現存していません。

宮上氏は「3代目池田右平は1670年頃に、当時加賀藩が入手した「安土日記(信長公記の祖本)」から創作したものだ。信長公記では、石垣が八角形であるとはわからないので、池上右平は安土山に登り、石垣を実測したのだ。」と主張しました。

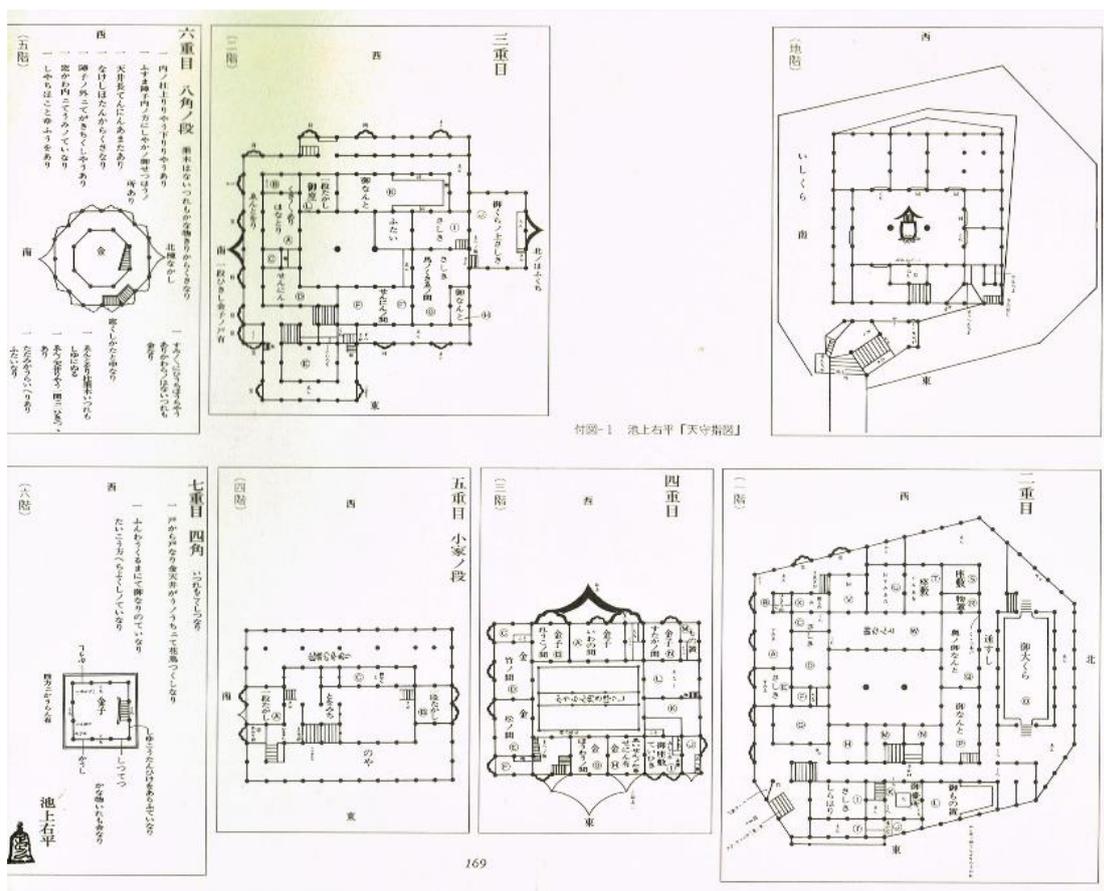
内藤先生は、大工・池上の創作説も事前に検討しており、昭和15年の發掘調査の始まる前の樹木が茂る天守台の写真から「江戸時代に、燃え落ちた天主の瓦礫を除去し、石垣を

実測し、また瓦礫を元に戻すことなどありえない。大工の建仁寺流の技術書の一つとして、安土城天守を天正時代に書き写したものが伝えられてきた。」と「天守指図」を結論付けています。

その内容の確かさは、新たな「測量」と「信長公記」との突き合わせによる「復元的研究」によって、実証されました。

中村泰朗氏は昨年「昭和15年の発掘調査の前に、内部六角形の石垣の姿と礎石の存在は知られていた。2002年の新たな発掘調査では幕末の薪の跡が新たに判明したので天主台内部の盗掘がされていたと推定する。よって、大工・池上は江戸時代に実測できなかったという内藤論はなりたない。」と新たに論を張ったのでした。

石垣内部は、叩き漆喰の上に焼けた壁土と腐植土が「尺余」ほど積み重なり、樹木が繁茂することはなかったので中村氏の指摘「盗掘があった」の推定は正しいと私も思います。



付図-1 池上右平「天守指図」

注：池上右平「天守指図」2006年講談社学術文庫「復元安土城」内藤昌著 1200円 5分の方眼に書かれていた原書を写し、文字は活字にしている。

内藤先生は、1969年全国に渡って木割書を調査中に、静嘉堂文庫の大工・池上家（加賀前田家）の資料200点の中に、「天守指図」巻物1巻を見出した。

しかし、「発掘」と「盗掘」を同じにはしてはいけません。不等辺8角形の石垣を四角形に収れんさせて天守を復元したのは、1977年の宮上氏だけでなく、昭和14年からの発掘調査を指揮した土屋純一氏も、昭和17年の報告書と共に同様に石垣を四角にして復元案を作成しています。

昭和15年の石垣の外側実測は、瓦礫を今見るように完全に除去することなく測られており、天守台は四角であったとの先入観にとらわれて、以後、幾人もの研究者から安土城天主復元案が発表されてきたのでした。

これらは、もしも、大工・池上が安土山に登って石垣を見たとしても、崩れた石垣、裏込割栗石、土砂と多量の焼けた壁土を前にして「天守指図」の不等辺8角形は描くことはできない査証です。

三浦（佐藤）氏は、三浦（佐藤）復元案によって、師匠の宮上復元案の四角い石垣を否定されているのですが、「天守指図」までを認めてしまっただけでは三浦（佐藤）復元案の根拠（豊臣大坂城からの妄想）がなくなるので、三浦正幸氏の弟子・中村泰朗氏は43年ぶりに「天守指図は、大工・池上の創作物」を「幕末に盗掘があった。だから、大工・池上が安土山に登らなかったという内藤論はなりたたない。」と、研究者としてありえない論理を学会に出したのでした。

内藤復元にある吹き抜けに対して、宮上氏は「ありえない。遺跡中央の礎石の無いのは「掘っ立て柱があったのだ。」と反論したのですが、2000年に、50～60cm深さ1.1mの穴を滋賀県教育委員会は採掘し、「燃えた掘っ立て柱の燃え残った痕跡がない。備前焼きの壺の欠片がある」事から、掘っ立て柱は否定されたのでした。

しかし、2005年三浦（佐藤）復元案は「掘っ立て柱」を残しています。姫路城には2本の黒柱がありますが、元は90cmあります。50cm角では、とても黒柱にはならないし、宮大工が「掘っ立て柱」を採用した事例を知りません。古代、手っ取り早く建物を固定するに「掘っ立て柱」であったのですが、直ぐに腐りますので、寺社、宮殿には用いません。大工・岡部は手っ取り早く固定するために直方体（吹き抜け）を考案したのでした。

現在の美しい石垣は、周辺に崩れおちた石を用いて昭和40年頃から新たに積みなおしたものです。私は昭和49年に穴太衆の二人が、滑車を使うだけで、全て手作業で石垣を積む所をみえています。名人芸であったことがアダになり、遺跡の旧状との区別がつかず研究者を困らせています。

なぜ、石垣が変形した八角形になったのか。山頂に出来るだけ大きな天守台を作るには、当時の土木技術では地山に沿った形で石を積み上げるしかなかったのでした。豊臣大坂城は平城ですが、綺麗な四角には出来ていません。



信長は安土城と城下町の屏風絵を狩野永徳に描けさせ、バチカンに送りました。20年程前に研究者がバチカンの倉庫を探すテレビ番組があったのですが残念ながら見つかりません。洛中洛外図を描いた永徳ですので、さぞかし天守の姿はハッキリと描かれ、内藤先生の復元の確かさの証明ができるかと期待していたのですが、かないませんでした。

逆に、キリスト教会身廊の天井の高い吹き抜け空間も、宣教師のもたらした絵画によって信長、岡部又右エ門も知っていたのではないかと、内藤先生は推定しました。十字架プランのクロス部にキューポラを載せているのは、私にも、館に望楼を載せた望楼型天守と相似して見えます。



注：天守中央の吹き抜け、4間（8.5m）×6間（12.7m）高さ8間（17m）の模型写真です。（城郭資料館 撮影・高橋和生）

地下は宝塔がおかれているだけで、この空間に人の往来はありません。2階の舞台が正面右に見上げられますが、3階の橋は吹き抜け内部に入らないと見上げられません。天井に同化しています。3階は信長の住まいですので、橋の往来できる者は極めて限られます。

教会の身廊は、多くの信者が奥行き深い空間に臨み、最奥部の祭壇に向かって水平に伸びる祈りの形です。一方、この吹き抜けの方向性は宝塔によって上に向かうしかありませ

ん。法華経のとなえる大地から湧き上がる造形です。

その垂直の宗教性をそこなうように、2階には舞台が設置されています。同じ2階の対面所から水平に見る事は容易ですが、かがり火を焚くわけにもいかず、油灯だけでは暗かったことでしょう。

内藤先生の言われた「天道思想」（＝何でもありのゴチャマゼ思想の上に信長が「主」となる）からの造形であり、カトリック教会の身廊にならって「吹き抜け」が生まれたとするのは、私は間違いだと思います。

私は、吹き抜け・アトリウムを商業施設・研究所において多く設計していますが、このように閉じた直方体空間に宗教性を狙いデザインしたというのは無理があると思います。

東大寺大仏殿の「吹き抜け」はこれより大きいですが、教会と同様に水平に伸びる祈りの空間です。大工の架構の妙から生まれた吹き抜け空間に、宝塔、舞台、橋と装置を後付けて並べたものと考えます。

この後 50 年かけて天守の架構は進化しますが、吹き抜けの架構は岡部又右エ門の安土城だけであり、この 6 年後に大工・中井政吉によって完成した豊臣大坂城は、入母屋の層を積み上げる架構です。

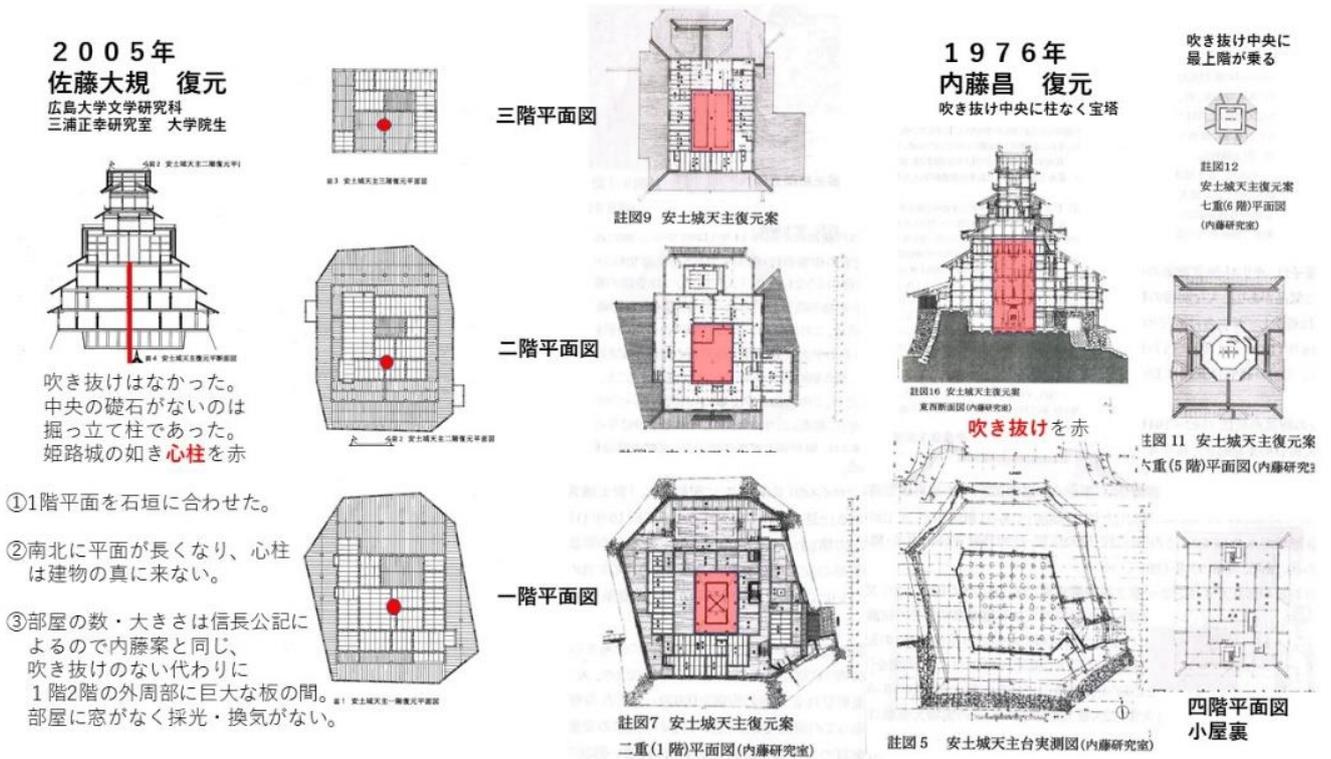
そして、正吉の子、中井正清がそれを層塔型の名古屋城天守に昇華させました。宮殿、寺院の如き木割りと装飾は、法隆寺大工の伝統技術を持つ、その正当性からなしえたものです。

1536年に作られた荒子観音多宝塔（名古屋市中川区）の心柱墨書には熱田宮棟梁甚四郎吉定とあり、岡部は名の通った大工の家でした。

信長は熱田の造営を通じて大工・岡部を信頼し、常に近くにおいていたようです。戦闘では工兵隊を指揮し、砦を作り、橋をかけ、城壁を破る高櫓を組み、土塁を築いたのでしょう。

長篠合戦図屏風には、物見の望楼が載った館がありますが、室町幕府の御大工・池上家とは違い、戦国時代の大工故に自在な発想を持てたのだと思います。信長に「山の上に背の高い建物を作れ」と命令された熱田の宮大工の岡部又右エ門ならではの発想「吹き抜け」

だと考えます。



私の考える「吹き抜け」造形の意味を書きます。私は建設会社の設計部にいましたので、設計・施工者の大工・岡部又右エ門のつもりになって以下を考えました。

内藤先生の論文の主語は信長であって大工・岡部又右エ門がありません。私はお客様の要望に従い建築の形をお客様に提案してきました。「麒麟が来る」では、光秀が矩計図に赤を入れるシーンがありましたが、今も昔も建築の専門家が建築の形を作るものであり、素人が図面に訂正を入れるあのような事はありません。以下の順に大工は考え、設計施工したのだと思います。

最初に、信長と大工・岡部又右エ門は、安土山に「信長は天下の主」と示す、金ピカの金閣を山頂よりさらに高く積み上げる。と、具体的な構想に合意した。

①山頂の石垣普請は、南北に長い不等辺八角形にならざるを得なかった。

そこで、

②金閣が載る敷地の中央を石垣内部に決め、4間×6間×高さ8間の直方体（吹き抜け）の架構をまず定めた。施工においても、直方体（吹き抜け）を先に施工して固め、高層木造建築を組みあげる芯とする。（現代の鉄骨建て方でも、柱が傾かないように、建て方順序を検討します。）

③3階大屋根の小屋組みを補強して金閣を載せる。

④5階は、6階の四角い金閣を内接する八角形平面として屋根の勾配となじませる。

⑤3層の巨大な館は直方体（吹き抜け）と不整形な石垣と繋ぐ架構の中で外観を整える。

⑥架構が先にあり、それに部屋を割り付ける。

窓が多く「とこ」のある南の部屋を中心にして廊下を回す。一階は台所・大広間を持ついわゆる遠侍であり、二階は対面所、三階は信長の私的空間であり廊下は必要なく、吹き抜けを利用する。天主入口に近い南東の階段を天主の主動線とする。

⑦外周部に部屋をならべ部屋の採光、通風を確保する。平面計画上、吹き抜けは「何もない空間・ボイド」として部屋の後ろに隠れてある。

京都所司代・村井貞勝が天正7年正月25日に、京の御所造営に生かすため、大工と共に安土城天主を見るの事を許され「殿主拝見記」の如くとまとめたものが、太田牛一に渡り、安土日記（信長公記 安土天主御天主之次第）となり、今に伝わります。

宮上氏、三浦氏、佐藤氏、中村氏は「吹き抜けが信長公記に書かれていない。よって吹き抜けは存在しない。」と主張されます。しかし、最近まで日本に「吹き抜け」という空間呼称はありませんでした。よって、「何もない空間ボイド」を拝見記に書き留められることはできなかったのです。

発見された「天主指図」に基づく内藤昌復元案によってのみ、日本建築史上初の高層建築物・天主の造形手順①～⑦を技術的に説明できます。

信長公記の「殿主拝見記」部分は、大工が見聞きしスケッチしたものを清書したように見えます。「指図」があつてこそ「殿主拝見記」が書けたのではないのでしょうか。「殿主拝見記」では金閣が八角形の上に乗っていることはわかりますが、それを構築する手順までは図面でないのでわかりません。

2005年の佐藤大規氏の論文には「内藤昌氏の復元案では。一重の屋根の軒が水平とならず斜めにせりあがるものとなっている箇所がある。・・・しかし、このような軒桁を斜めにしてしまうと、軒桁からの水平距離と屋根勾配をかけわけて母屋桁の高さを決定する伝統的な大工工事ができなくなってしまう。」と大工技術を持ち出していますので、今回、佐藤復元案と内藤復元案を並べてみました。見比べてください。「天主指図」による内藤復元案こそ、大工の知恵と工夫に満ちていると読み取れましょう。

大工・岡部又右エ門が初めての日本初の高層木造建築を建てようと考え、かつ不整形の石垣形状にあわせるには、現在知る「大工の規矩術にあつていない」では復元できません。先端が斜めに焼かれた軒瓦が発掘され、内藤先生の復元が正しいと証明されました。

●なぜ、内藤案と三浦案は、これだけ違うのか？

一素人には、テレビ放映で、この違いはわからないだろう。一内藤昌案では5層目の八角形が乗っかるのは3階の入母屋屋根の上だが、三浦正幸案では4階の入母屋屋根に乗っている。私は三浦案の4階を内藤案のように千鳥破風だと思っていたが違うのだ。入母屋の屋根だった。三浦復元の大坂城をみてわかった！師匠の宮上茂隆と同じで、内藤の発見した「天守指図」を無視する三浦は宮上と同様に大坂城復元にしか根拠はない。しかし、大坂城復元の根拠に「天守指図」のような図面があるわけではなく屏風絵しかない。だから師弟で大坂城復元が大きく違う。師弟共に大坂城も安土城も妄想の産物なのである。

内藤昌 復元案 1976年



三浦正幸（佐藤大規）復元案 2005年



私には「どうして、これだけ違うのか？」ですが、テレビ放映を見ている古建築に素人にはこのように並べても、その差はなかなかわからないと思います。

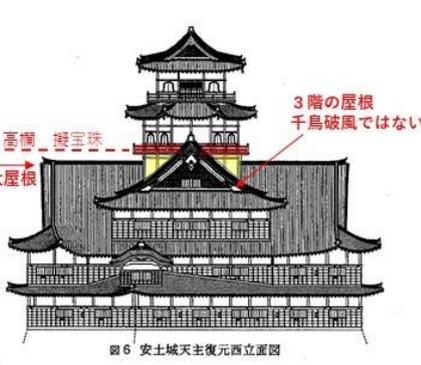
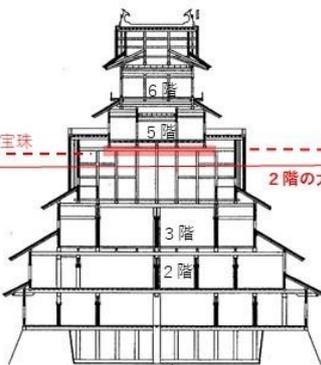
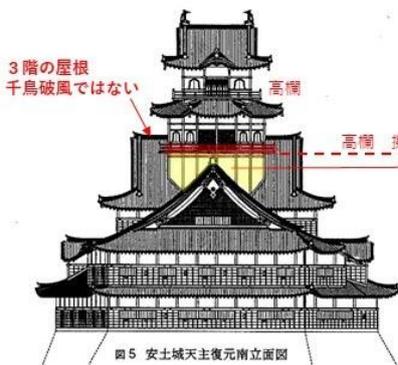
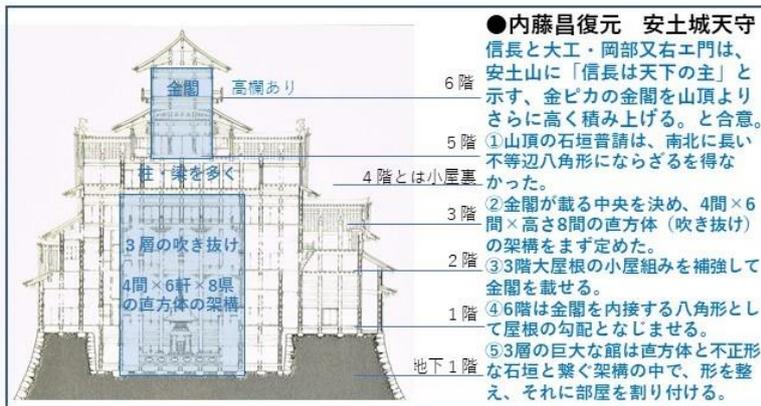
気が付くのは、「内藤案は安定して積みあがって見えるが、三浦案は最上階の金閣が突出して不安定に見える」ではないでしょうか。

私も、三浦案の3階屋根を千鳥破風と思い込み、「大きいなあ〜」と感じるぐらいでしたが、今度、2005年に佐藤大規氏が日本建築学会に提出した平面図、断面図、立面図を入手して、混乱の理由が2つある事がわかりました。5階の高欄と、豊臣大坂城からの復元です。

●三浦（佐藤）復元案の混乱は高欄

その1：信長公記の5階の記述に、「高欄擬宝珠彫り物あり」とあるので、8角形の5階の外側に6階の高欄同様に回すとした。
一方、内藤は「天守指図」には、「かうらん」は6階のみであり、5階にはなく、擬宝珠を5階と6階を繋ぐ「階段」の勾欄（手すり）につけて復元した。

その2：高欄を四周回すために、5階床組を3階小屋裏の上方にひきあげ、2階屋根を高くし、2階屋根にも5階を載せた。結果、3階の屋根は小さく、2階に載り、一見すると3階屋根が千鳥破風に見える。しかし、高欄は屋根に隠られて四周は回らず、5階と3階の繋ぎ（黄色に着色）は構造的に無理があり、見た目にも不安定となる。



1つは、5階に高欄を回すことにこだわったからです。宮上案は、高欄を屋根に埋没させたありえない形でしたので、3階屋根を小さくし高欄を2階屋根の上に回すように改善したのでした。しかし、それでも3階屋根によって、高欄は四周を回る事はできません。

こだわったのは、信長公記の5階の記述に「高欄擬宝珠彫り物あり」とあるからです。三浦（佐藤）復元案は、8角形の5階の外側に6階の高欄と同様に回すとしたのでした。一方、内藤先生は「天守指図」には「かうらん」は6階のみあり、5階には「かうらん」はなく、擬宝珠を5階と6階を繋ぐ「階段」の勾欄（手すり）につけて復元しました。

内藤案は、3階の大屋根の上に望楼（5階、6階）載せているのですが、三浦案は2階屋根を大きくして、2階屋根にも望楼（5階、6階）を載せています。



注：三浦（佐藤）案模型写真 学習研究社（GAKKEN）2009年名城物語第1号信長の城

六階の屋根部分

赤い唐様の瓦に、外壁の群青と柱・高欄などの金が華やかに映える。四隅には風鈴が下がっている。



廻縁のある五階部分

廻縁は朱に塗られ、縁下には鯨と飛龍の彫刻がはめられていた。

には並

模型の細部を見ると、直ぐに雨漏りがしそうに見えます。2階、3階の屋根の両方の棟にまたがる八角形の架構を私は想像できません。

欄干を最上階の外部に回す望楼型の天守は、そこからの雨漏りに困り、後から欄干の先端に雨戸を入れています。

6階の金閣を高く持ち上げる為の繋ぎの5階の八角形であり、外陣を設けてまで大入母屋となじませている「天守指図」ですので、5階に欄干がないのは当然です。

信長公記の記述が全てだとして、三浦氏は間違いを犯しています。

廻縁を設けていて、廻縁と棟の陰になって見えないところに鯨と龍を復元していますが、これは、信長公記の「御縁輪のはた板ニハしゃちほこひれうかかせられ候」から復元したのでしょうか。

「天守指図」による内藤復元案に見れば「縁輪」とは5階の八角形の外陣（入側）を指すことがわかります。



二つめの理由は、「天守指図」は存在しないといわれているので、師弟それぞれく安土城が灰燼に帰した1582年のあくる年に大坂城建設に秀吉はかかっており1585年に完成した豊臣大坂城こそ、安土城天主を復元する根拠となりうる>としているからです。

現在の天守は、徳川大坂城の石垣の上に「太閤さんの城」を昭和初期に復元したものであり、その時の根拠は屏風絵と大友、フロイスの見聞記しかありませんでした。

その後、大工・中井家から城の配置図が発見され、豊臣時代の石垣が1984年、現在の天守閣に近い深さ7メートルの地中で発見されたことにより、2013年から2021年まで発掘が行われていました。徳川は豊臣の城の痕跡がないように10m以上の盛り土をしたのですが、今回の発掘で「野づら積み」という古式の石垣が出てきました。

しかしながら、安土城の石垣のように豊臣大坂城の石垣の全貌が見えているわけではありません。



大坂図屏風 正面は西、北面は左に



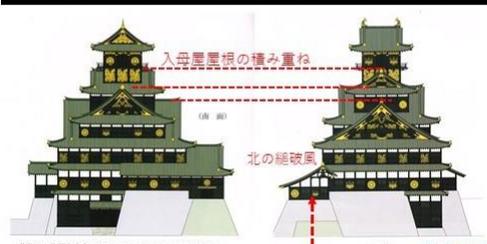
大津組 1984年 宮上案による本丸全体図



中井家 大坂城之図 大津組図は南・西から見る。

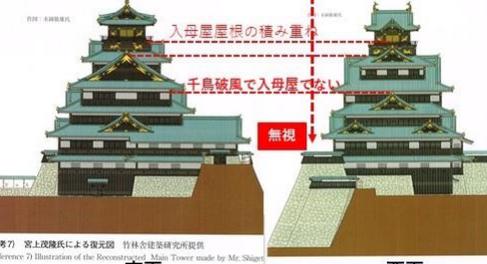
2008年
三浦正幸(佐藤大規)復元案

大工・池上の「天守指図」無視して、遺跡の石垣「実測図」と「信長公記」記述だけで安土城天主を復元できるだろうか？ 答えは大坂城復元案からの安土城復元でした。



豊臣大坂城天守 1585年

「大坂城図屏風」「大坂夏の陣屏風」「大坂冬の陣屏風」「エッゲンベルク城博物館屏風」「大友家文書」「フロイス日本史」と資料は同じ



豊臣大坂城天守復元

2005年
三浦正幸(佐藤大規)復元案

信長が自刃し、秀吉は大坂に直ちに城を作る。豊臣大坂城が安土城の復元推定には大切なのだが、師弟で豊臣大坂城復元がこれだけ違う。



安土城天主 1579年

石垣が違う。宮上は大坂城に合わせて安土山の遺跡・石垣も変えた。



安土城天主 1579年

1984年
宮上茂隆復元案

1977年
宮上茂隆復元案

豊臣大坂城の宮上案と三浦（佐藤）案の違いの根拠の一つは、天守台の石垣の形状把握の違いにあります。

しかしながら、三浦（佐藤）案といえども、発掘が完璧に行われたわけではなく、全体の実測図があるのではないので、中井家の配置図によるところが多く、実測された安土城天主のような研究はできません。

中井家の配置図は、安土城の「天主指図」のように、各階の平面図があるわけなので様々な案が出来ます。

安土城にはなく、豊臣大坂城にある強みは「屏風図」です。ただ、絵師が鳥瞰図として書いていますので、その絵の解釈が研究者によって違い、復元案の違いとなります。どちら案も、安土城復元の発表より、大坂城復元の発表が遅いのですが、豊臣大坂城の復元の研究から安土城天守を復元しています。

宮上茂隆氏の豊臣大坂城の研究は「豊臣秀吉築城大阪城の復元的研究」建築史研究37号、昭和42年（1967年）などによって広く知られています。1977年国華の宮上氏からの「内藤昌氏「安土城の研究」の疑問」においても、豊臣大坂城を引き合いに出しての論述が多いです。

両案の違いですが、宮上案は上から4層目の屋根に千鳥破風をおいていますが、三浦案は4層目の屋根も入母屋です。すなわち、安土城の復元と同様に、2階の入母屋大屋根のすぐ上に3階の入母屋を載せ、その上にまた入母屋を載せ、最上階の3間四面を置いてお

り、最上階の背が異様に高くなっています。安土城天主のように、大坂城では高欄を2層に回すことがないのですが、入母屋の屋根の通減率が大きくこのようになっています。

「天守指図」のように、3階の入母屋を大きくすれば安定すると思いますが、屏風絵が層塔型天守のようにリズムカルに入母屋屋根が積み重なってある事からこのように復元したのでしょうか。

どちらの案も各階の平面形状をそれぞれ自由に想定しているので、違った印象を受けます。

安土城天主の内藤案の東立面図・西立面図をみると「館の上に金閣を載せる」のコンセプトが明解なのですが、わずか6年の違いで、リズムカルな入母屋屋根の積み上げとなったのは、建築技術の発展というのではなく、秀吉の天守への思い、建設のコンセプトがまったく信長と違うからであり、その結果、天守の形が大きく変わったのだと思います。

岡部又右エ門は子と共に、本能寺の変で討ち死にしており、秀吉は安土城を手伝った法隆寺大工・中井政吉に設計施工を任せました。

内藤先生の安土城天主「造形の意味—天道思想」と同様な研究が欲しいところです。

信長は天の主としてのシンボルの形を自らが住む館に求めたのですが、大友、フロイスの大坂城見聞記を読むと秀吉は天守に住んでいません。また、大坂城は平城であり、安土山100mの上に建てた平山城とは、都市的な意味合いも変わってきます。

天守の多くは、関ヶ原の戦いの後、慶長期に建てられています。城マニアは、戦闘シーンにわきますが、城郭は幕府の一国一城の令により藩の行政・司法の場となり、天守はその城下町のシンボルとしての価値しか持たなくなりました。個人の思いが天守の造形に入ることなどなくなり、ひたすら高く層塔型のつまらない天守の形に収れんしていきました。

家康の江戸城天守は屏風絵も何も残っておらず、駿府の隠居城から類推するしかありませんが、信長、秀吉、家康、それぞれ覇者の城がどう変わっていったのか。安土城天主にしか「指図」はないだけに、今に残る白亜の姫路城、名古屋城に如何に天守の造形が結びついていったのか。まっ黒なこの大坂城を見るに、疑問が次から次と湧き、興味は尽きません。

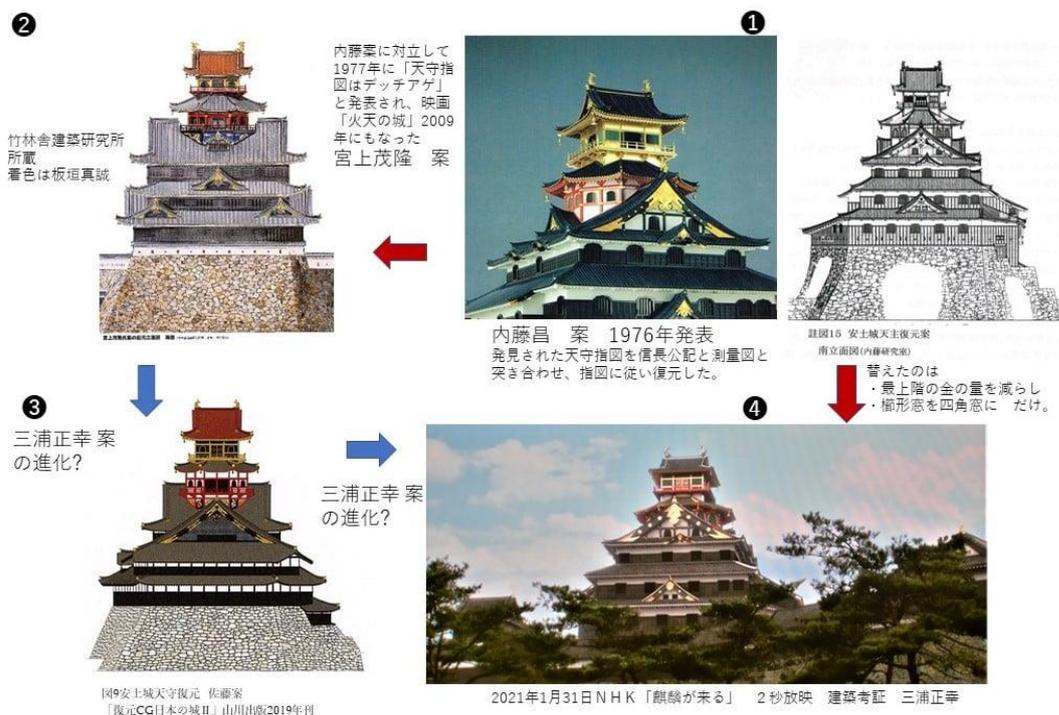
●まとめ

大坂城の大林組の復元図には、木造で豊臣大坂城を復元するのは40億円でできるとあります。大阪はコンクリート天守の耐震改修に舵を切る前にこんなこともしていたのでした。名古屋城天守木造化事業への反対運動から始まった私の天守のお勉強でしたので、これが今回のNHK大河ドラマ「麒麟が来る」での私の最大の成果となります。

名古屋市の河村市長の思いつきだけで木造化を進めるのではなく、市民には木造天守復元だけでなく耐震改修と比較して説明しないと、木造天守の実現などできません。城への歴史的评价も民主主義も名古屋にはありません。悲しいことです。

●追記：令和3年1月31日「麒麟が来る」最終回を見てから、

「内藤案じゃないか！」と、3人の弟子は一致。安土城天守復元「麒麟が来る」1月31日放映の後 メールで確認しあいました。



内藤案から替えたのは、
①最上階の色

屋根の棟に金を置き、
壁の金を減らし、青色を塗り
高欄を朱色に。

②楕形窓を頭が直線の四角窓に

3階の妻を南に向けて、1階から6階まで、千鳥破風・窓 の位置・数の全てが内藤案からの盗作です。そして、破風の金、色使いが下卑たものになりました。

内藤先生の発見した「天守指図」に基づかないとこの姿になりません。①②によって三浦案と称する「建築考証 三浦正幸」なのでしょう。内藤先生の著作権はご子息（実質は弟子が管理）がお持ちですが、NHKから放映許可の願いはありませんでした。

三浦正幸氏を学会でとっちめてやろうと、放映を楽しみにしていた私はすっかり肩透かしにあいました。天主のお勉強も必死に行い、長文も書いたのですが、、、
NHKに文句を言うなら「著作権侵害と、三浦氏に「私が復元したCGが麒麟が来るで流される。」と前振り番組で言わせたことを謝れ」でしかありません。
仲間からは「まあ、内藤案なんだからいいじゃないか。昨年9月学会の中村泰朗氏の「天守指図 内藤昌へ批判」に、学会で反論「中村泰朗氏が間違っている」をすればよい事」と言われました。

確かに、学会での論文発表はいつも弟子にさせる三浦氏です。このような復元（盗作）をして、金を稼ぐ男など相手にしないことです。

しかし、三浦氏は「城博士」として、名古屋城天守木造化の推進力となっているのです。不節操なタレント学者、千田氏と同様のインチキ「城博士」なのですが、それに惑わされるのが城マニアなんですよ。ここが、腹立たしいところです。